



TITLE:

マーシャル島民の航[海]圖

AUTHOR(S):

織田, 武雄

CITATION:

織田, 武雄. マーシャル島民の航[海]圖. 地球 1936, 25(3): 222-239

ISSUE DATE:

1936-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184536>

RIGHT:

るを以て各河川は短しと雖も河口に近く扇狀地を發達せしめ易い狀態にある。更に、夙川以東は武庫川・猪名川の大三角洲が、潮流の東南に轉向するにつれて、益々その發達を促進せしめる狀況にあるのである。概して六甲山地南方の海岸は急に深度を増すに比し、河流の大なるも

のなきは潮流作用と相待ちて、武庫川・猪名川及び淀川下流の如き大平野を出現し得ない原因であると考えられる。以上の沖積層は地形と介層とによりて新舊二層に分ち得る。

(昭和二年一月二六日稿)

マーシャル島民の航海圖

織田 武雄

一

南洋諸島の住民が文化的に低い段階にあるにも拘らず、航海術の點に於てのみは極めて高い能力を有して居ることをヘットナーも述べて居るが(A. Hettner: Der Gang der Kultur über die Erde. S. 49) 實際彼等は羅鍼儀^{ヒンペ}、六分儀等^{セキスメント}の航海器具を携へずに、古くから自由に諸島間を往來して居たのである。併し歐羅巴人の渡來以

後新しい航海術が輸入され、また經濟事情も一變して以前ほど諸島間の交易を求める必要がなくなつた爲、却つて現在では彼等の優れた航海術は衰退し、僅にカロリン島民の天體觀測の技術とマーシャル島民の所謂桿條地圖(Stabkarte)と稱せられる航海圖にその名残を止めて居るに過ぎない。

尤も茲に彼等の航海術全般に關して述るつも

りではないから、カロリン島民の天文學的智識に關しては他の機會に譲り、以下地圖學的研究の一つとしてマーシャル島民固有の桿條地圖に就て二、三の文獻より得た所を記してみたのである。

第一圖



マーシャル群島は三十三個の環礁より成りその各個は更に數十に斷裂して總數約九百個の小島を數ふるが、此等の環礁は略ラタック（日出

マーシャル島民の航海圖

る島）及びラリック（日入る島）の二島列に分れて居る（第一圖參照）。

マーシャル群島の學術的調査は一八一六年の露國船リューリック（Rurik）號の來航に始るのであるが、當時同船に便乗して詳細な報告を發表した獨逸浪漫派の詩人として、また植物學者として有名なシャミッソー（A. v. Chamisso）も桿條地圖の存在することには氣付かなかつたようである。従つて桿條地圖を最初に傳へたのは米國宣教師ギョーリック（L. H. Gulick）であつて、彼は一八六〇年に桿條地圖二面をエボン島の酋長の妻より譲り受けて布哇に持ち歸り、現にホルルの博物館（Barnece Puhai Bishop Museum）に陳列されて居る。斯の如く桿條地圖の智識が遅くまで傳らなかつたのは、島民が深く之を秘して居たからであつて、ギョーリックの語る所によれば、彼に地圖を與へた婦人は酋長の妻ではあつたが、外人に秘密を漏洩した罪に依つて死刑に處せられたと云ふことである。

歐羅巴に桿條地圖が將來されたのは之より約二十年遅れ、ヤルット島駐割の獨逸領事ヘルンスハイム (F. Hensheim) が一八七九乃至八〇年にその一面を持ち歸つたのが始りであるが、殆んど同じ頃にハンブルグのゴドッフルア (Godoffroy) 博物館にも同博物館の南洋派遣員 (クバリー J. S. Kubarye-) の手に依て五面の地圖が集められた。斯して桿條地圖の存在が一般

ベルリン	9	シドニー	2
ハンブルグ	6	ドレスデン	1
スツットガルト	6	エディンバラ	1
ワシントン	4	ライデン	1
ライプツヒ	3	ミュンヘン	1
ホノルル	3	オックスフォード	1
プレーメン	2	ウィーン	1
ストツクトン	2	ストツクホルム	?

に知れ渡ると共に相次で和蘭のライデン博物館、伯林の民族博物館等にも到着しシエック (A. Schuck) の調査に従へば既に一九〇二年には歐米の博物館に上記の如く四十三面の桿條地圖が所藏されて居

我國に就ては資料のないため之を明かにし得ないが、松村教授は故山崎博士將來の一面を、松岡大佐は南洋協會所藏 (?) の三面と同氏所藏の一面を記されて居り、京大地理學教室にも亦三面が陳列されて居る。殊にマーシャル群島が日本の委任統治領となつて以來此地を訪れる人が少くないから、或は我國には案外多くの桿條地圖が所有されて居るのではないかと想はれる。併し桿條地圖製作そのものゝ智識が既に島民にとつても過去のことゝなつて居るから、中には單に旅行者の好奇に投ずるための模造品の含まれて居ることも否み難いであらう。

なほ桿條地圖に關する論文は非常に乏しいが一應その主要なものに就て附記して置かう。桿條地圖を初めて傳へたギューリックの談話の概要は一八六二年の海事雜誌に掲載されたが、地圖の構造に幾らか觸れたに過ぎないものであつた。其後ウィット (J. H. Witt)、ヘルンスハイム等も若干桿條地圖に就て述べ、またゴドッ

等の著書も亦重要な文献である。

我國に於て最初に桿條地圖を紹介されたのは恐らく故山崎博士の東洋學藝雜誌に發表された「未開人の海圖」と題する論文であらう。その後松村博士・松岡大佐もミクロネシアの民族學的著作に於てこの地圖に關する研究の一端を發表された。殊に松岡大佐の著書「南溟の秘密」は前記のヴィンクラ―・シュツク等の見解に私見を加へて論ぜられたものであり、邦文の文献として最も詳細なものである。

三

桿條地圖とはその名の示す如く、ココ椰子の葉柄から作つた直線及び曲線の桿條(Stab)を、同じく椰子の葉の纖維を以て組合せ、これに貝殻や小石を結びつけた珍しい地圖である。桿條地圖の形狀は後に示す如く種々雜多であるが、ヴィンクラ―は地圖の用途に従つて、①マタング(matang) ②メド(medo) ③部分圖 ④ヘベリブ(rebelib) ⑤全般圖の三種に分

フルア博物館彙報には同館所藏の五面の地圖の解説が附されて居る。但し此等は何れも全く斷片的な説明に止るものであつたから、桿條地圖の基礎的な研究の端緒は一八九九年の海軍評論に發表されたヴィンクラ―(Winkler)の論文に始ると云つてよい。ヴィンクラ―は當時軍艦ブッサルト(Bussard)號の艦長としてマーシャル群島を巡航し、群島知事イルマー(Irmer)の紹介によつて酋長ネルやロジャツク等の島民に親しく接し、通譯を介して從來秘密とされて居た地圖の構造や使用法を明かにすることを得た。次で一九〇二年にはシュツクが前述の如く四十三面の地圖を比較して「マーシャル島民の桿條地圖」(Die Stabkarten der Marshall-Insulaner)と題する詳細な研究を公にした。この著書はこの方面に於ける最も優れた勞作であり、その後未だこれを凌駕すべき程度のものは見出されな

い。その他桿條地圖そのものの研究ではないがドレーゼン(W. Dröber) クラームネン(A. Krämer)

類して居る。

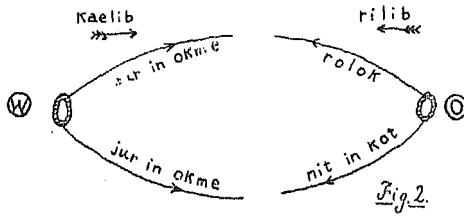
ではこの桿條或は小石や貝殻は何を現はしたものであらうか。ギョーリックが始め想像した如く小石や貝殻は島嶼（環礁）を示したものであるが、併し桿條は潮流（Strömung）や普通の波即ち海浪（Seegang）ではなく、ヴァインクラークが述べて居る様に、多くの場合ウネリ（Dünung）及び異なる方向のウネリが會合した波會（Ausgleichsstelle）を現はして居るのである。何故ならば潮流は海水の水平的運動であるから、海水中に板を突差してみるかしないと潮流が流れて居るか判然としないが、ウネリは海水の垂直的運動であるため、水面の昇降によつて遠くからでも識別することを得、従つて航海の好目標となるのである。また海浪もウネリも等しく海水の垂直的運動ではあるが、海浪は風の直接的衝動によつて比較的狭い地域に生ずる強制波であり、強風の場合は波頭は飛沫をあげて奔騰するが、風が風げば海面から消失する。之に反して

ウネリは遙か遠方の強制波の生じた箇所から波動が傳播して來た自由波であり、波長が極めて大きく、風の有無に拘らず、絶えずゆるやかな運動を續けて居るのである。殊にマーシャル群島は東北貿易風帶と赤道無風帶の間に位置して居るのであるから、その近海は世界でも最も著しくウネリの現れる所である。それ故にマーシャル島民は此等のウネリを巧に利用して航海し、また我々がコチ（東風）、ハヘ（南風）、ナラヒ（北風）ニシ（西風）など、風を呼稱して居る様に、島民も亦ウネリの事情に精通して夫々特殊な名稱を與へて居る。

よつてヴァインクラークが擧げて居るウネリの名稱や、其他桿條地圖の解讀に必要な言葉を示すならば次の如くである。

① リリブ 「背骨」の意味で東のウネリを云ふ。東のウネリは東北貿易風の餘波であるから最も強く、常に明瞭に認めることが出来る。

第二圖



② ケリブ 西のウネリである。西のウネリは東のウネリに比すれば遙かに弱く、熟練したものではないと容易に見わけがつかない。

③ ブンドッケリック 「南より来る」の意味で南のウネリを指す。南のウネリは東のウネリと同様に強く、常に判然として居るが

殊に島の南部に明瞭である。

④ ブンドッケイング 「北より来る」の意味で北のウネリを云ふ。島の北部に於て最も明かである。

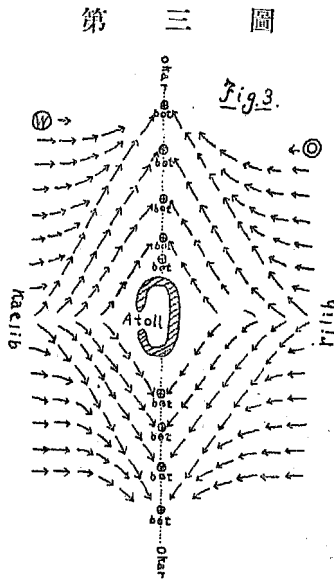
⑤ ロック ウネリが環礁に衝突すると其の反壓を受けてウネリの

方向を轉ずるが、ロックは北西に轉向した東のウネリを指すのであつて、島の西側に強く現はれる(第二圖参照)。若しこのウネリにカヌーを乗り入れると北西に流されて容易に島に到着し難いので島民は航路を「失ふ」意味でロックと呼んで居る。

⑥ ニトインコト 南西に轉向した東のウネリを云ふ。このウネリに乗るとロックの場合と同様にカヌーを操舟する自由を奪はれ、丁度陷穽に落ち込んだ様であるから、島民は「コトコト鳥を捕へる陷穽」に擬へてニトインコトと名附て居る。

⑦ ジュルインオクメ 北東及び南東に轉向した西のウネリのこと、道に立つ柱の意味である。それは恐らく流水が水中の柱にあたつて二方向に分れる如く、ウネリが環礁によつて二方向に轉ずるからであらう。

⑧ボト 二つの相反する方向のウネリが切合った點即ち波會を云ひ、ボトとは「結び目」のことである。(第三圖参照)この波會は航海上の最も重要な目標であり、波會に於ては波浪の起伏が著しく減じ、水面に特殊な波紋が現れる。



⑨オカール 波會を連ねた線であつて、この線を辿れば確實に環礁に到達し得ることは、恰も椰子の根を傳つて椰子の幹に達すると同じであるから、島民はオカール

即ち「根」と呼んで居る。従つてオカールは一般に航路に用ひられるのである。

⑩アイト 潮流を云ふ。なほクレールは島嶼の近くを流れる潮流をエイル、やゝ遠くを流れる潮流をエバングと呼ぶと述べて居る。

⑪ノインレアル ノはウネリでない普通の波浪を指し、レアルは「東」の意味である。即ち東の波のことである。

⑫アイ 島嶼の視認距離を示す言葉であるがヴァインクラールによれば島民は之を三種に區別して居る。

⑬ジェラダイ カヌーのマストから椰子を認め得る距離。約一〇哩一八・五軒

⑭エグダイ 船より島嶼を認め得る距離約一五哩二七・八軒(?)

⑮ジュガイ 陸地を認め得る距離。

⑯エイインカビン ド 満潮乃至干潮の作用によつて礁湖内の海水が流出し、礁湖外

の海水に衝突すると、その限界に於て波が騒音をたて、白く奔騰する。この礁口附近の潮の落合(おちあひ)(Kabbelung)をエイ・イン・カビン・ドと云ひ、約一五哩の遠方より認めることが出来る。

四

マタングは酋長が子弟に波浪現象及び航海技術の基本的智識を授けるための教授用の地圖である。それ故にマタングは一般にシンメトリカルに近い最も簡単な構造を持ち、多くは方形、或は菱形をなして居る。斯の如く方形或は菱形をなして居ることは島民が視界を限る水平線を圏状ではなく、四邊をウネリを以て圍まれた四角形のものであると想定して居るからである。

第四圖はマタングの主な形態を示したのであるが、そのうちのa圖は宣教師ハイド(M. Hyde)がホノルルのビショップ博物館に將來した方形の形態を持つものである。即ちa圖の四邊の桿條は東西南北のウネリを以て圍れた想定海面で

あり、中央の直線ABはA島—B島間の航路を示すものと考へられる。二本の曲線A r B・A r' Bは東西のウネリであり、象限の對角線上にある桿條は轉向したウネリの列向を表はして居るのであらう。三本の横線が何であるか明かでないが、島の視認距離(アイ)、潮流(アイト)、或は南北のウネリの影響する限界の何れかを意味して居るに違ひない。また各交點に結びつけられたX狀の小片は波會(ボト)である。併し柁の外に突き出て居る二本の斜狀の桿條は此等の波浪現象を示すものではなく、教授の際に實際のそれとを對稱するために、このマタングを他のメドやレベリブに結び付ける支へである。

b圖はクレーメルがアイリングラプ島の舟小屋の中から獲たもので、單に教授用ではなく實用品であつたことは疑ひないが、併しクレーメルがメドと記して居るのは誤であらう。矢張りa圖と比較してみても、シュツクの説の如くマタングと看做すのが至當である。b圖の中

央の直線 AB は A 島 (アイリシングラブラブ) — B 島 (ヤルト) 間の航路、その兩側の曲線 $A'r$ $B \cdot A'r$ は島嶼の附近で彎曲した東西のウネリ、即ち $A'r$ はニト イン コト、 $A'r$ はロロッ

ク、 $B'r \cdot B'r$ はジュール イン オクメである。 A B 線上の $o \cdot p$ 二點の薄片はクレーメルに従へば潮流 (アイト) を示すものである。同様にクレーメルは上下夫々二本の横線も二つの潮流 (エ

イル・エバング) を表はして居る

と述べて居るが、 a 圖の場合と同

じく島の視認距離、或は南北のウ

ネリの影響する限界とも想定され

る。例へば松岡大佐はエバングの

意味が「圍ひ」であるこら推して

もクレーメルは潮流とする見解には

左袒し難いとされ、少くとも一線

は南北のウネリの影響する限界で

あると主張して居られる。また $A \cdot$

B 兩點の周圍にとりつけてある山

形の桿條の意味も判然としなが

——松岡大佐は礁湖の潮流を感じ

る海面 (エイインカビン) と

考へられたが——その頂點に當る

第四圖

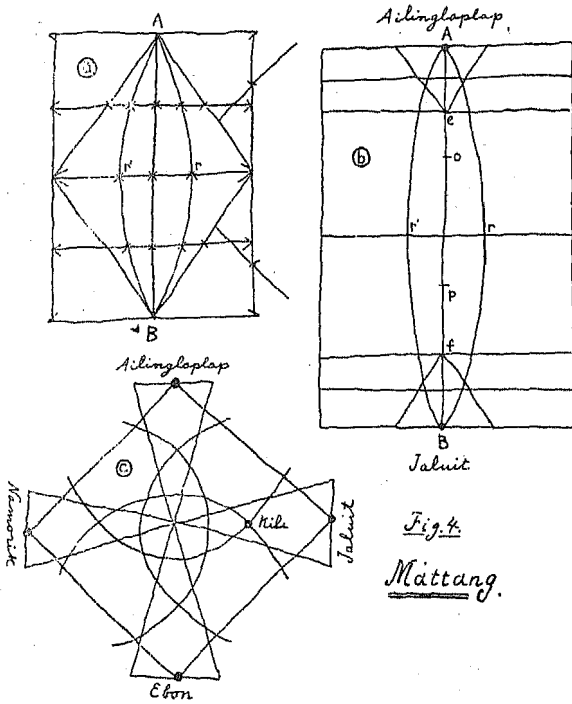


Fig. 4

Mattang.

e・f 點が波會であることは、航路がこの二點を通過して居ることから見て明かであり、從つて山形もウネリを示して居るとするのが妥當な様に思はれる。クレールも亦之を東及び西のウネリと看做して居る。

c 圖は菱形のマタングの一つでクレールが將來したものである。菱形はマタングの最も一般的な形態であつて、シュツクの記載して居るマタング十一面の中七面までが夫であり、京大地理學教室所藏のものも同様である。而してこの種のマタングが夫々異つた島を現はし、異つた島で作製されたにも拘らず、非常に類似した菱形の形態を示して居ることは、シュツクが述べて居る様に此等のマタングが同じ系統に由來することを物語つて居るのであらう。併し斯の如く構造が簡單であり、形態が類似して居ても、各研究者の傳ふる解説は必しも一致して居ない。それは研究者達に島民が同じ方法を以て説明を與へたとは限らないし、また島民の言葉に精通

せずして、桿條地圖の如き島民にとつてタブーとなつて居る技術を正確に知ることにも困難なからであらう。よつて茲では一例としてクレールの記載する所を引用するに止める。

C 圖はクレールが四島圖(メド エメン エニ)と呼ぶと記して居る如く、ヤルト・アイリングラブラブ・ナモリック・エボンの四主要島間の關係を示したもので、菱形の輪廓はウネリに圍れた四島間の海面である。また交叉する四條の直線は東及び西のウネリ、四條の曲線は各島に對する北乃至南のウネリの列向を示して居るのである。而して此等の線の交點を述ぬれば、それはオカル、即ち各島間の航路となるのである。

五

メドはマーシャル群島の一部を現はした部分圖で、四島乃至それ以上の島嶼が含まれて居るが、レベリブに比較すれば部分圖だけで島嶼の數は少い。

シツクの記載して居る十六面のメドを地域的に分れば、十三面までがヤルト島を中心とし、周圍のアイリングラブラブ・ミリ・エボン・ナモリックの諸島を含むもので、僅に残の三面が

ラリック島列の北端を現はした部分圖である。併しメドを一般に構造上より分類すれば、直線を以て構成されたものと、直線及び曲線を以て構成されたものと二種に區分し得る。

第五圖のa圖は直線を

第五圖

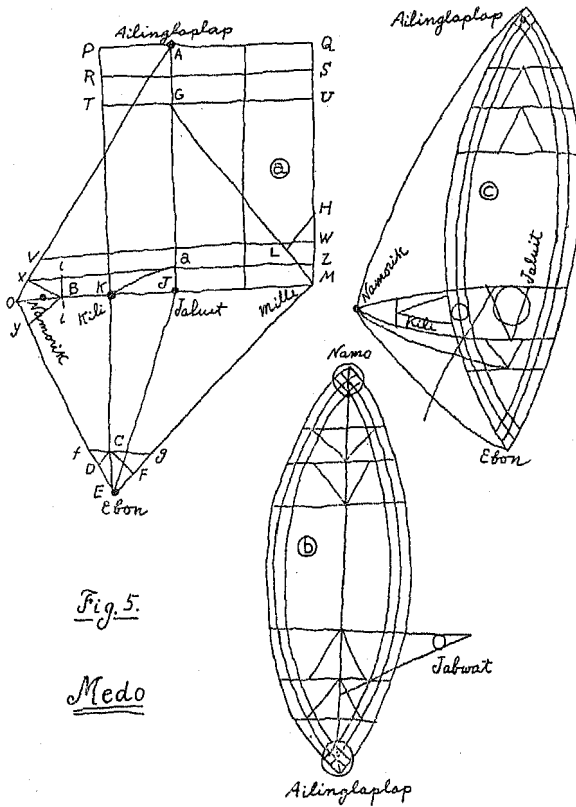


Fig. 5.

Medo

以て構成されたメドの一種で、メドとして最も普通の形態である。併し菱形のマトングの場合と同様に、形態は類似して居てもその説明は異つて居る。一例として島民ラウナによるヘルンスハイムの解説と、島民ロジャツによるヴィンクラの解説とを記せば、兩者の間には次の如く可なりの矛盾が存在する。

ラ ウ ナ		ロ ジャ ッ ク
PQ	?	北のウネリ
RS	南のウネリ	//
TU	//	//
OA	南東のウネリ	ナモリック島に對する西のウネリ
OE	東のウネリ	//
GM	北東及び南西のウネリ	ミリ島に對する東のウネリ
ME	南東のウネリ	//
VW	北のウネリ	南のウネリ
XZ	//	//
JM	南のウネリ	//
XB	北東のウネリ	南東のウネリ
YB	南東のウネリ	北東のウネリ
ll	東のウネリ	東の波(ノインレアル)
BK	北及び南のウネリ	—
Kd	東南東のウネリ	ヤルート島に對する北のウネリ
LH	東のウネリ	ミリ島に對する南のウネリ(本來はミリ島の南東の岸の外にあるべきであるが、之を取りつけることが不可能なため、假に此處に置いたのである)
fg	北のウネリ	エボン島視認距離
CD	南東のウネリ	西のウネリ
CF	東のウネリ	東のウネリ

この兩者の何れが正しいかを遽に決定することは困難であるが、大體に於てロジャックの解釋に正當と思はれる點が多い。

b 圖及び c 圖は共にクレメルが將來したものので、直線及び曲線を以て結ばれて居る。b 圖はネモ・アイリングラブラプ島のメドであるが、外廓の各三條の曲線は夫々東のウネリ及び西のウネリを表はして居るのである。また上下に附せられた各三本の直線は北及び南のウネリの限界を示し、四個の山形の頂點は波會(ボト)である。それ故にボトを通じてメドの上下兩端を

連ねた直線は、オカール即ち兩島間の航路に當るのである。なほ二本の外に突き出た桿條に挟まれた小回は、兩島の東側に介在するデヤバット島の位置を表示して居るのである。

c 圖はヤルト島を中心とするエボン・キリ・ナモリック・アイリンググラブラブ島のメドである。c 圖の外廓の三條の曲線や上下各三本の直線、或は四個の山形をなす桿條は、b 圖の場合と同様に夫々東西南北のウネリ、及びウネリによつて生ずる波會を現はして居るのである。しかしc 圖の特色とする所は外側のナモリック島に多くの曲線の集つて居る點である。此等の曲線は即ちナモリック島とヤルト島の間にみられる南北のウネリを示して居るのであるが、なほこの外に一個の山形の桿條によつて兩島間の南北のウネリによる波會と、それに結び付けられた小桿條によつてナモリック島の視認距離が記されて居る。

六

シュックは彼の研究に用ひた二十一面のレベリブを地域別に分類して、

- ① マーシャル群島の全部を示すもの
- ② 東西兩島列の一つを示すもの
- ③ マーシャル群島の南北何れかの部分を示すもの

の三種となして居る。この分類が果して妥當であるかは、分類の基礎にしたレベリブの數が少いたため疑問であるが、併し兎に角レベリブは群島の全部か若くはその大部分を圖示したものである。従つてメドと截然たる區別があるわけがないが、概してレベリブは桿條の數も増し複雑な構造をなすものが多い。

レベリブのうち最も簡単な形態を示すものは直角及び斜交する直線によつて構成されたレベリブである。第六圖のa 圖はその一種であつてハンブルグのゴッドフルア博物館の所藏に屬する。このレベリブの直角に交る直線は、島嶼を表示する貝殻を取付けるための枠であり、

第六圖

マーシャル島民の航海圖

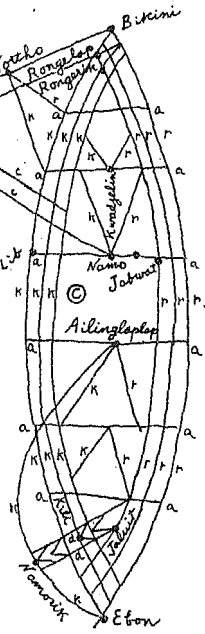
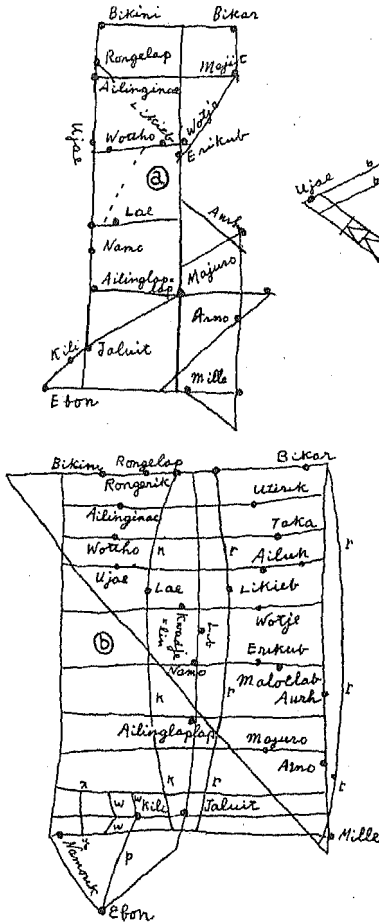


Fig. 6.

Rebbelib

それ故に略同一方向に位置する島嶼は同一直線上に配列する——斜交する直線は各方向のウネリと波會の線を示して居るのであらう。尤も桿條地圖の目的がウネリの現象を表現するにある

以上、レベリブに附せられた島嶼の位置や距離は正しくない場合が多い。殊にこの種の簡單な形態を持つレベリブに於ては、一層不正確であることを免れない。

b 圖は、ウィンクラウがベルリンに將來したもので、島嶼の位置は第一圖と比較してみても大體に於て符合して居る。多數の横に引かれた桿條は島嶼に當る貝殻を結び付けるためのものであつて、別に意味のあるものではないが、縦に

引かれた r と附記する二條の曲線は東よりのウネリに、 k なる曲線は西よりのウネリに該當する。またヴァインクラールはアルート島とナモリック島の間に介在する二個の w なる山形の桿條も東のウネリであるとなし、本來キリ島の東に位置すべきであると看做して居る。併し xy なる小桿條はナモリック島附近の東の波 (ノイン

レアル) の限界を示すものであるから、キリ島を過ぎてなほ西の方に東のウネリが認められ、ナモリック島の近くまで東の波が及ぶものとすれば、圖にある如くキリ島の西に位置して居ても差支へない筈である。更に前記のメドの場合に於て山形の桿條が波會を示して居たことを考へれば、この w なる桿條も東のウネリではなく、東西のウネリによつて生ずる波會を表はして居るのであると云へないこともない。少くともエボン島とキリ島とを結ぶ p なる桿條は、兩島間の波會の線、即ちオカールであることは確かである。なほミリ島から北西に向つて斜めに長く

延ばされた桿條に就ては、ヴァインクラールは説明を與へて居ないが、シュツクの想定した如く、この方向に於ては北東或は南西のウネリが顯著であること、同時にアイリングラブラフ島を始め北西に位置する島嶼に向つての航路を表示して居るのである。

c 圖は b 圖と同じくヴァインクラールが將來したラリック島列のレベリブである。メドの c 圖の如く輪廓が曲線を以て構成されて居るのは、波濤の關係を詳細に圖解せんがためと思はれる。例へば r なる多くの曲線は凡て東のウネリを、 k なる曲線は凡て西のウネリを示し、兩線の交叉する地點が東西のウネリの會合する波會である。またビキニ島—ウジャエ島・ナモ島—ウジャエ島・ヤルト島—ナモリック島の間に取付けられた各二本の平行線 $b \cdot c \cdot c \cdot d$ は南北のウネリを表はし、その中間の小山形の桿條は波會に當るものである。なほ a と符號した六本の横線が何であるか明瞭でないが、恐らくナモ島

及びバルト島に對する三種の視認距離(アイ)を意味して居るのであらう。即ち若し東及び西のウネリを利用して、ビキニ島から南のエボン島に向つてカヌーを走らすとするならば、その航路に於てロンゲリック島からナモ島を、アイリングラブラブ島からバルト島を直接見通すことは、兩島とも最長視認距離外にあるから絶對に不可能なことである。

七

以上に於て桿條地圖のマタング・メド・レベリブに就き、夫々代表的と思はるゝもの三種づゝを選んで解説を加へたのであるが、桿條地圖の起源が何であるか、この種の原始的な航海圖がマーシャル群島のみに限られるものであるかと云ふ疑問がなほ残されて居る。併しシュツクの研究に於ても、この興味ある問題は未解決の儘であるから、此處では單にその要點を附記するに止めて置かう。

マーシャル島民の航海術の發達系統が充分調

査されない以上、桿條地圖の起源も亦到底明かにし得ないのであるが、シュツクの述べて居る如く、桿條地圖の原始形態は所謂鋪石圖(Steinsetzung)と密接な關係があると推定される。鋪石圖に就ては、ドレーベルの「自然民族の描圖法」(Kartographie bei den Naturvölkern)と題する論文に詳細に論じてあるが、要するに石・木片・貝殻、その他種々のものを用ひて、地形・島嶼・村落・道路等を地面の上にモザイク的に表現した自然民族の間に屢々見出される原始的な描圖法であり、桿條地圖の貝殻・小石を以て島嶼を示す方法と極めて類似した點が存在する。また桿條地圖がマーシャル群島固有のものであるとしても、他の地域にこの種の航海圖が全く存在しないとは斷言出來ない。既にシュツクの著書にも、之に關する二、三の資料が示されて居る。試みにその一つを引用してみると、聯合汽船會社ユニオン・スチム・シップ・カンパニーの船長がパーシー・スミス(Percy Smith)に與へた報告によれば、ヴィチ(フイー

デ) 諸島には、杵の内に平行に多くの繩を張つた素朴な航海圖があつたと云ふことである。

勿論桿條地圖以外の原始的な航海圖の實物が現存して居ないとすれば、此等の報告を直ちに信ずることは危険である。だが他方太平洋諸島間には古くから廣範圍に亘る交通が行はれて居たこと、或は原始人の思考過程が屢々類似した形態をとり得ることを考ふれば、マーシャル群島の椰子の葉柄から作つた桿條に代つて、他の島嶼に於ても、繩やその他の手近に入手し得る材料により、同じ様な航海圖を嘗て作つたことがあるのではないかと想像される。併し近代的な航海術が輸入されると共に、島民固有の航海術や地圖作製の方法が既に忘れられ我々も亦是まで此の種の地圖に對して殆んど注意を拂はなかつた爲、現在ではこの問題に對して決定的な斷定を下すことは最早不可能に近いのではなからうか。

後記 桿條地圖の如き我々の表現法と著しく異なる自然民族

の地圖を、僅かの文獻に表はれた文字によつて理解することは非常に困難なことである。従つて前記の小文に於ても、述べて意の及ばざる所や、誤謬を犯して居る點もあることと思はれる。それ等の點に就て御示教を給はれば幸ひである。

なほ小文を草するに當つて參照した文獻は、

A. Schück : Die Stabkarten der Marshall-Insulaner.

Hamburg 1902

W. Drober : Kartographie bei den Naturvölkern.

Diss. Erlangen 1903

A. Krämer : Hawaii, Ostmikronesien und Samoa.

Stuttgart 1906

H. Lyons : The Sailing Charts of the Marshall

Islanders. (The Geographical Journal

LXXII) 1928

M. Eckert : Kartenwissenschaft. Bd. 2. Leipzig u.

Berlin.

松村 瞭

Contribution to the Ethnography of Micronesia (Journal of the College of

Science, Imperial University of Tokyo)

1918. 未開人種の地圖(地理教育六ノ八)

山崎直方

未開人の海圖(東洋學藝雜誌三〇ノ三七八)。

我が南洋

松岡 靜雄

南溟の秘密・ミクロネシア民族誌

その他直接参照する便宜を得なかつたが、参考のために梓條地圖に關する重要な文獻を記せば、

Winkler : Über d. in frühern Zeiten in den.

Marshallinseln gebrauchten Seekarten.

(Marine Rundschau) 1898

P. Hambruch : Die Schifffahrt auf den Karolinen

und Marshallinseln. (Sammlung Meeres-

kunde) Berlin 1912.

新著紹介

○地名の研究

柳田國男著 四六版本文及索引三六八頁
東京古今書院發行 一月 定價一圓八〇錢

我國唯一の地名研究家である柳田氏が三十年間に亘つて講演し、記述したものを地名に大關心を持たれてゐる少壯地理學者の山口貞夫氏が編集されたものがこのスマートの成書である。著者の地名に對する態度は地名から古い日本の生活を知り出さうとするのであるから我國民性を認識するのに役立つものとなる。さうした深い考の下で我國の地名の如何なるものかを講説した「地名の話」「地名と地理」「地名と歴史」と題する略似た三篇の總説で本書の三分の一を充たし、餘は地名考説として各論に這入つてゐる。但し考説の五十五項中

の最初の六項までは總説に屬するものである。多くの切れ切れに説述されたものをかうした體制を採らした編者の勞を多としなければならぬと同時にこゝに後來我國の地名研究上に一つの土臺を置いたことになつたのは地理學界の爲慶賀の至りに堪へない。夫にしても我國地名研究の材料とすべき地名の蒐集輯成が行はれなくては研究を進めることが困難である。英國の様な記録局で古文書の地名を輯成する機關のない我國では地名研究の聲の上つた時にこれも英國の様な地名協會の設立を企て、そこで地名蒐集の様な繁雜な仕事をした。現在では「文獻索隱」の五萬分之一地形圖の地名索引位しか材料のないのは如何にも残念である。本書は後來起らなければならぬ我國地名研究の或る方面の指針を與へたものであるのと地名研究が地理上、國民性認識上効果多く且つ興味深いものであることを教へる點に於て地理學徒の必ず座右に備へなければならぬものであることは誰れも否めないと思ふ。(中村)

○蒙古地名ノ解説

滿洲國蒙政部總務司調查科編
菊版一一八頁 地圖四葉附 康德二年二月

滿洲地名の地理學的研究には滿鐵田口稔氏のフランス文の成書があるが邦文でない爲め一般に行き渡らぬのを遺憾としてゐた。茲に蒙政部調査科員何晋扎布氏の解説したものを同科員首藤榮喜氏の日譯した興安各省内に於ける蒙古地名の解説を得たことは蒙古語や各種の地方語に縁遠かつた我等に採